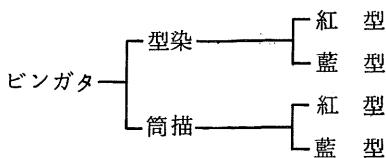


## 藍型（イエーガタ）の技法—城間栄喜氏 からの聞き書きをもとにして—

渡名喜 明

### 1. 藍型とは

ふつう紅型（ビンガタ）というと、多彩な型染を連想する。ところが、紅型には単彩のものもあるれば、型紙を使わないものもある。もっぱら藍だけを使い、部分的に墨を加える手法も紅型にある。これを「イエーガタ」（藍型）と呼ぶ。紅型には、型紙を使わず、糊袋（糊筒）で糊を生地の上に絞り出しながら模様を描いていく筒描の手法もある。筒描にも藍型がある。多色染めの型染や筒描を、藍型に対して「紅型」と呼ぶことがあるが、「ビンガタ」ということは両者の総称としても使われる。



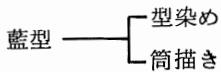
ここではとくに藍型の技法について、城間栄喜氏からの聞き書きをもとにして述べてみたい。城間氏は紹介するまでもなく、王朝時代から続いた紅型宗家のひとつ城間家の技法を受け継ぐ人であり、戦後の紅型復興にはかり知れないほど貢献した人でもあって、現在県の無形文化財に指定されている。氏は沖縄伝統びんがた技術保存会の会長として後継者養成にも力を入れておられる。

さて、紅型の型染はもっぱら衣料を染めるための手法である。王朝時代、藍型の衣裳は土族階級の日常着、室内着とされたほか、一般庶民でも年寄に限って細い模様のもの着用が許されたという。旧王家の尚家所蔵の衣裳が紹介されている講談社刊の『琉球王家伝来衣裳』には、王家の紋である左三ツ巴紋が藍型に染められた衣裳が見える。それからすると王族も藍型の衣裳を着用したものと思われる。

城間氏によれば藍型用の図柄として定まったものはなく、また図柄の大きさとこれといって決まったものはなかった。たとえば、踊衣裳は今でこそ色あざやかな多色染めで大柄の紅型と決まっているが、戦前は藍型による「クサイガタ」（鎖型、いわゆる鎖大模様である。背から裾まで種類の違った大模様の型紙で染められている）の踊衣裳もあったという。

筒描きは一般に風呂敷や幕、旗などの大きなものを染める手法である。幕は主として村踊りで使う「アシビマーク」（遊び幕）と葬式のときを使う「ウリーマーク」（憂い幕か）に分けられる。アシビマークには松竹梅に鶴亀、牡丹などを多色染めにし、地色を紺地や浅葱地に染めたものが多く、またウリーマークは所有者名を丸中に白抜きとし、藍一色で染めたものが多かった。多色染めの風呂敷は婚礼祝いのときの御馳走や花嫁道具を包んだり、覆ったりするのに使い、松竹梅、牡丹、菖蒲、菊などを丸文にした。藍型の風呂敷は清明祭や靈所巡りのときに御馳走を包むのに使った。

宮城文氏の『八重山生活誌』によると、八重山では葬式のとき藍型の風呂敷を頭からかぶることがあった。藍型の風呂敷には松竹梅や牡丹を丸文にしたものが多い。



## 2. 藍と生地

藍型に使う藍はリュウキュウアイである。この藍は戦前から沖縄本島北部が主産地になっていた。戦前の藍は「ンムニー」（さつま芋のきんとん）のように丸めて手に持てるぐらいの固さで、芭蕉の葉を敷いた竹製のザルに入れて運んできたという。

これを木灰や苛性ソーダで仕込む。戦前は業者が木炭といっしょに木灰を運んできたので、これを買って使った。水をたっぷり加えて水面に浮かぶ不純物を取り除き、その澄まし汁（トゥグル）を藍甕に入れるのである。ふるいを通して木灰をそのまま入れることもあるが、不純物が残るのでトゥグルを使う方がよい。

藍甕に入れる藍の量は、濃く染めるためのものか、浅く染めるためのものなのか、目的によって違ってくる。それに建てて間もない藍もあれば、何度か使った藍もあるので、戦前は藍甕が5つほど並んでいたという。建てたばかりの藍を「ンジバナ」、何度か使った藍を「ナカエー」、かなり使って色もあまり染まらなくなった藍を「ジーエー」と呼ぶ。今は藍甕の数が少ないので、染めむらを防ぐために生地をあらかじめ水につけてから浸染にするが、戦前は水につけずジーエーにひたしたという。

藍型に使う生地は芭蕉布や麻が多い。戦前は桐板（トゥンビヤン）も使った。芭蕉布や麻は糸を作る段階である程度精練されるし、繊維も細かく撚りも少ないので染まりやすいのである。これにくらべて木綿はそのままでは油脂が多く、撚りも強いので染まりやすいとはいえない。綿は染めた後黄色味がかることがある。生地はトゥグルで煮沸して精練する。

大正年間から昭和初期にかけて、フェーランカー、シルミミー、アカミミー、トゥンビヤンなどの麻類が中国から大量に入ってきた。トゥンビヤンは別として、他の生地は簡単な藍型に染め、普段着に縫われることが多かった。型は染他型（後述）で、地色は浅葱地が多く、随所に筆で軽く墨をつける「チーチキビン」の手法を多用した。

## 3. 地色のこと

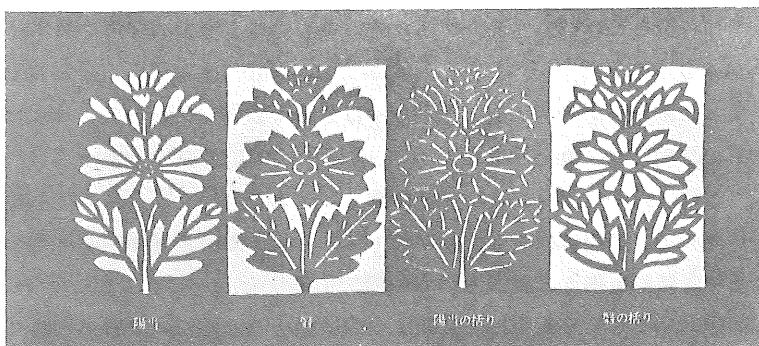
琉歌で、濃紺に染められた藍の色を若鳥の羽にたとえることがある。これは機を織る糸の色を歌っているが、藍型でもそれこそ若鳥の羽を思わせるほど濃く地を染めるものがある。これを「クンジー」（紺地）と呼んでいる。クンジーよりも色が明るくなって青味を帯びると「アサジ」（浅葱地），色がさらに薄くなっているゆる水色になると「ミーデ」（水色地），それよりもさらに淡い色が「オーエーデー」（青藍地）と呼ばれる。ただし、クンヂとアサヂ、アサヂとミーデ、ミーデとオーエーデーの間にはっきりした色の区分があるわけではない。アサヂやミーデには色の幅がある。たとえばアサヂはフカアサヂ（深浅葱地）とウスアサヂ（薄浅葱地）に分けることがある。ミ

一チも同様である。しかし、これとて色の境が決まっているわけではない。

オーエ一チを染めるのに、藍を仕込んで後、まだ藍が十分建たないうちに薄く染める場合と、いわゆる生藍染めにする場合とがある。藍草を刈りとり、これをホーロー引きなどの非金属質の鍋に入れ、摂氏60～70度ぐらいで煮てからさますと藍花ができるので色素が出る。これを20～30度ぐらいにまでさまして浸染にするのが生藍染めである。どちらかといふと前者の方法で染めることが多い。

#### 4. 型紙の彫り方

型紙の彫り方には「スミジャー」（染地型）、「シルヂ」（白地型）、「ハンシルヂ」（半白地型）、「シダイイ型」（すだれ型）の4種がある。染地型は模様の部分を彫り、地の部分を残す彫り方で、白地型は地の部分を彫り落とし、模様の部分を残す彫り方である。染地型はいわゆる陽当と陽当の括りの彫り方で、白地型は翳と翳の括りの彫り方ということになる（写真1参照）。



陽当の括りは線を白く抜くもの、翳の括りは線を染まりで出すものである。

地を残すものが染地型で、地を彫り落としたものが白地型ということであるが、地を彫り落とすか残すかとは別に、図柄そのものの彫り方にも染地型と白地型がある。写真1の例でいえば、地を彫り落としていることから

すると「翳」の菊と「翳の括り」の菊はともに白地型であるが、前者の花や葉をとってみると、それ自体としては地を残し、葉脈や花弁の線を彫り落とした染地型の彫り方になっている。また、後者の花や葉では地が彫り落とされ、縁の線を残した白地型の彫り方になっている。

写真2は地を彫り落とした白地型の紅型であるが、貝、菊、葉の型の彫り方を見ると、白地型に彫ったものと染地型に彫ったものを並列して型染めの効果を出している。このように、実際の紅型や藍型は上記の4つの手法を場合によっては単独で、また場合によっては組み合わせることによって全体の模様を作りあげているのである。型染の藍型の場合には濃淡の藍の色と墨の黒、それに生地の白の3色しかないので、とくにこの4種の彫り方を生かすような配色の工夫がなされる。

なお、白地型の紅型の地染をしたものと染地型と呼ぶ人がいるがこれは誤まりで、地染をしてもしなくても白地型は白地型である。

半白地型は1枚の型紙で、白地型に彫られた部分と染地型に彫られた部分が半々ぐらいの割合になっているものである。その中でとくに、段型とは、部分がはっきり区分けされているものをさす（写真3）。

「シダイ型」は地の彫り方がちょうど簾のようになっていて、ところどころに花や竹の葉、霞などの図柄を配したものである（写真4）。

「カサニ型」（重ね型）というのがある。これは模様の違う中柄や小柄の型紙2枚を使って重ね染めをする手法である。ふつう染地型と白地型の型紙を使って重ねる（写真5）。藍型にもこのカサニ型がないわけではないが、城間氏の話ではあまり効果を出せないという。例は少ない。藍型の重ね型を「イェーウブルー」と呼ぶ人もいるが、城間氏のいう「イェーウブルー」は別の手法である。

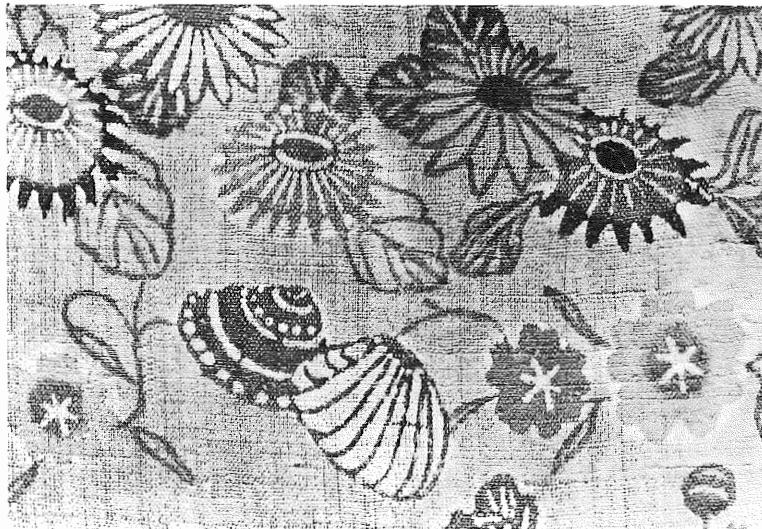
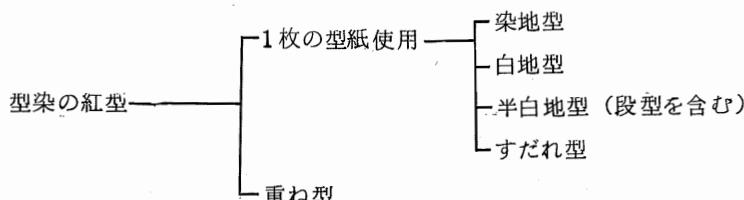


写真2 浅葱地菊模様（沖縄県立博物館蔵）



##### 5. 染地型の藍型

写真6は、城間氏が染地型の見本として染めたもので、藍型になっている。図柄を見ると、牡丹の花弁、葉、蝶の羽が染地型に彫られたものと白地型に彫られたものの組み合わせになっている。この藍型に施されている手法を牡丹の花と葉をアップした写真7で見ることにする。

牡丹の花弁と葉のなかで染地型に彫られた部分は、地を染める前に墨で限どりがなされている。限どりの後、地を浅く染める。それから糊筒を使って、限どりをした部分を糊伏せする。その後でもう1度地を染めると、糊伏せをした箇所は最初の地染めのときの色が残り、2回目の地染めの後は地の色より浅くなっている。最初の地染めが浅葱地か、水色地か、青藍地かでこの部分の色は違ってくるが、いずれにせよ地色よりは薄いので、この箇所が浮き出てくるような印象を与える。この手法を、糊伏せした箇所の藍の濃さにしたがって「アサヂバナドゥイ」（浅葱地花取り）、「ミーチ



写真3

段型雲花模様

地の濃い部分が、染地型。薄い部分が白地型になっている。  
(岡村吉右衛門『続琉球古紅型』より)

写真4

シダイ型雪笹花模様

ただし、この裂地は藍染を基調にしてはいるが、花には黒以外の色が施されていて藍型にはなっていない。

(城間栄喜氏蔵)

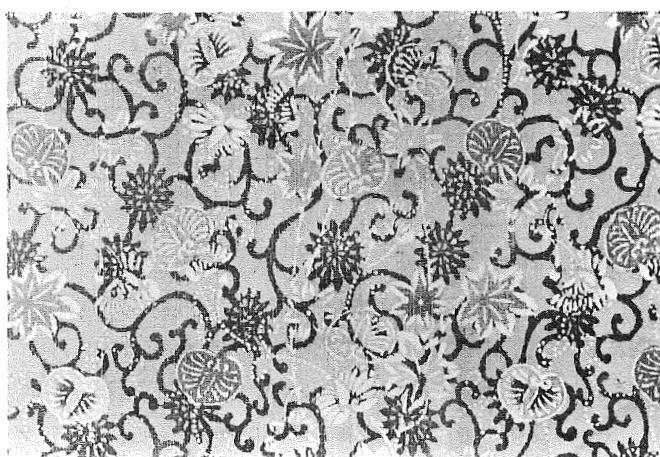
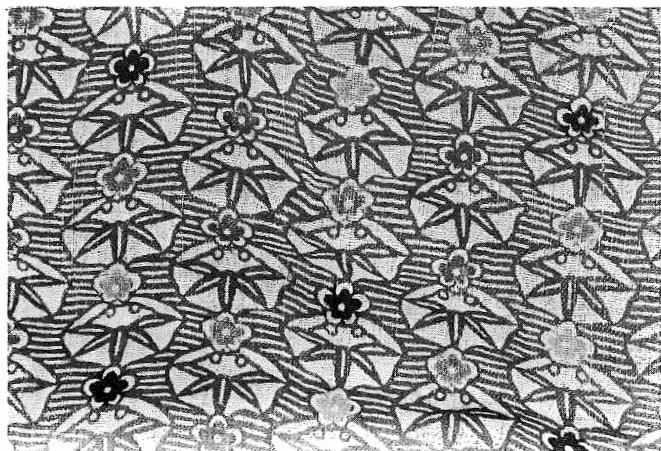


写真5

花ウブルー型葵菊八手唐草模様

重ね型の紅型を藍以外の色で地染めしたものを「花ウブルー」という。

(沖縄県立博物館蔵)

「バナドゥイ」（水色地花取り）、「オーエーバナドゥイ」（青藍花取り）と呼ぶ。この「ハナドゥイ」の手法は必ずしも花の図柄に施されるわけではない。

上記の「ハナドゥイ」は染地型の図柄に彫られた部分に施されたものであるから「スミヂバナドゥイ」（染地花取り）と呼ばれる。これに対して白地型に彫られた図柄にも「ハナドゥイ」の手法がある。写真7の例でいうと、牡丹の花と葉のなかで白地型に彫られたところは第1回の地染めのときから糊置きがされているために白くなっている。これを「シルヂバナドゥイ」（白地花取り）と呼ぶ。染地型の図柄と同様に、白地型の図柄にも「アサヂバナドゥイ」、「ミーデバナドゥイ」、「オーエーバナドゥイ」がある。

「ハナドゥイ」が施された部分はいずれも地色や図柄の輪郭より色が薄いことになるので、各種の「ハナドゥイ」を併用するときは、糊伏せや地染めを何回かくり返さなければならないことになる。しかし、これが染め全体に奥行と表情を与える効果を出しているのである。

染地型の藍型には紺地と浅葱地しかない。水色地や青藍地だと地と図柄の対比が弱く、効果を出せないからである。

なお、染地型に彫られた図柄に墨をさし、その黒さが染め全体にアクセントを与える手法もある。これは「クルバナンジャサー」（黒花出し）と呼ばれ、ふつうの染地型にもあるが、とくにシダイ型の藍型に配された細模様の図柄によく見られる。大柄の図柄にはない。写真4の紅型には5つの

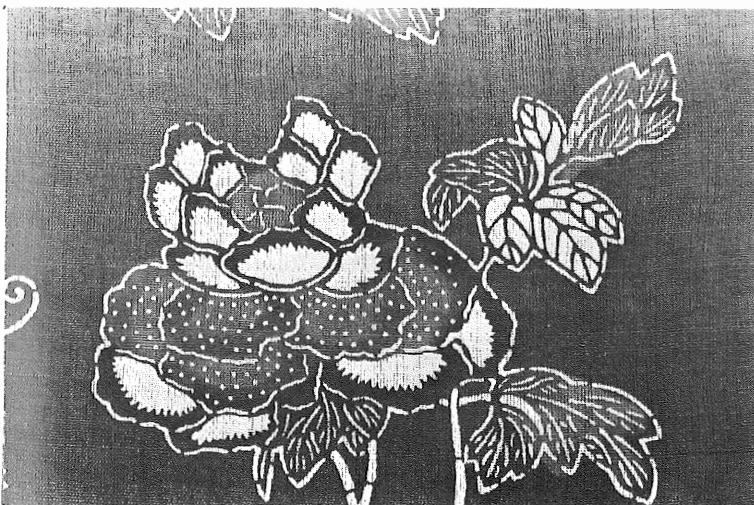


写真7 「バナドゥイ」の一例

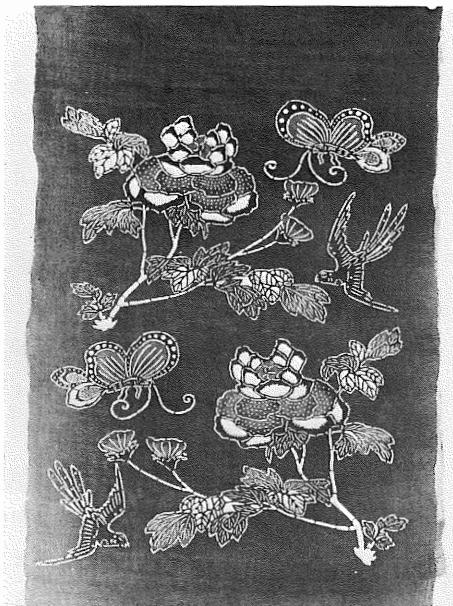


写真6 紺地牡丹蝶燕模様（城間栄喜氏作）

「クルバナンジャサー」がある。

筒描きの藍型は型紙こそ使われないが、防染の方法、模様の描き方、地染をするなどからして染地型の部類に入る。浅葱地と紺地があり、染地バナドゥイのうちのアサヂバナドゥイとミーデバナドゥイが施される。筒による白い線の太さ、力強さと、伸びきった線の勢いが、濃淡の藍の色と不思議な調和を見せ、多

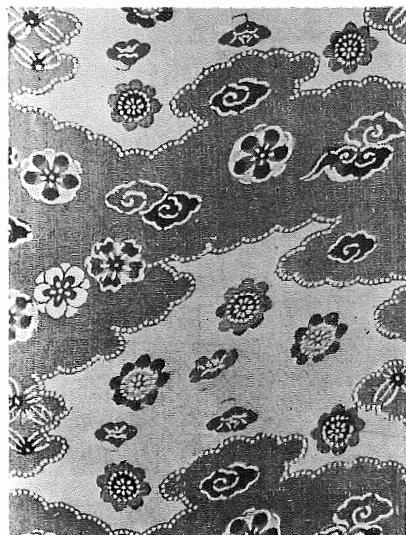


写真3

段型雲花模様

地の濃い部分が、染地型。薄い部分が白地型になっている。  
(岡村吉右衛門『続琉球古紅型』より)

写真4

シダイ型雪笹花模様

ただし、この裂地は藍染を基調にしてはいるが、花には黒以外の色が施されていて藍型にはなっていない。

(城間栄喜氏蔵)

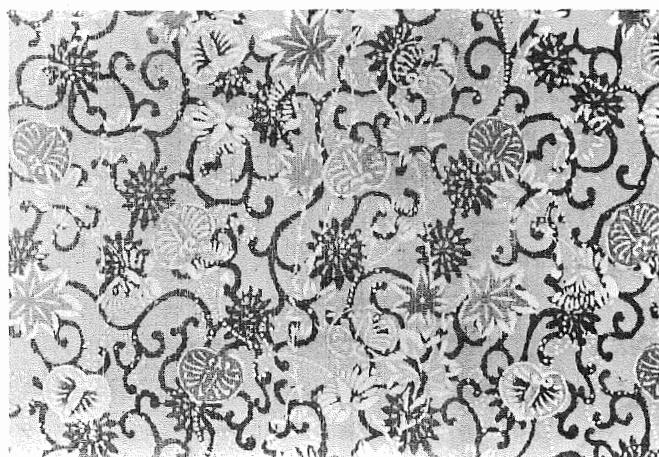
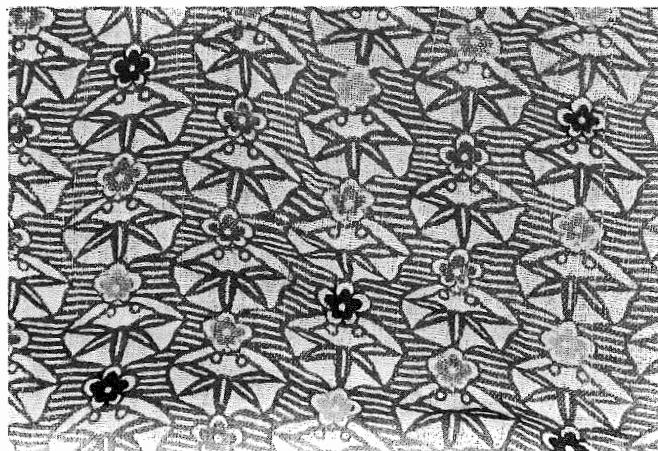


写真5

花ウブルー型葵菊八手唐草模様

重ね型の紅型を藍以外の色で地染めしたものを「花ウブルー」という。

(沖縄県立博物館蔵)

「バナドゥイ」（水色地花取り）、「オーエーバナドゥイ」（青藍花取り）と呼ぶ。この「ハナドゥイ」の手法は必ずしも花の図柄に施されるわけではない。

上記の「ハナドゥイ」は染地型の図柄に彫られた部分に施されたものであるから「スミヂバナドゥイ」（染地花取り）と呼ばれる。これに対して白地型に彫られた図柄にも「ハナドゥイ」の手法がある。写真7の例でいうと、牡丹の花と葉のなかで白地型に彫られたところは第1回の地染めのときから糊置きがされているために白くなっている。これを「シルヂバナドゥイ」（白地花取り）と呼ぶ。染地型の図柄と同様に、白地型の図柄にも「アサヂバナドゥイ」、「ミーチバナドゥイ」、「オーエーバナドゥイ」がある。

「ハナドゥイ」が施された部分はいずれも地色や図柄の輪郭より色が薄いことになるので、各種の「ハナドゥイ」を併用するときは、糊伏せや地染めを何回かくり返さなければならないことになる。しかし、これが染め全体に奥行と表情を与える効果を出しているのである。

染地型の藍型には紺地と浅葱地しかない。水色地や青藍地だと地と図柄の対比が弱く、効果を出せないからである。

なお、染地型に彫られた図柄に墨をさし、その黒さが染め全体にアクセントを与える手法もある。これは「クルバナンジャサー」（黒花出し）と呼ばれ、ふつうの染地型にあるか、とくにシダイ型の藍型に配された紺模様の図柄によく見られる。大柄の図柄にはない。写真4の紅型には5つの

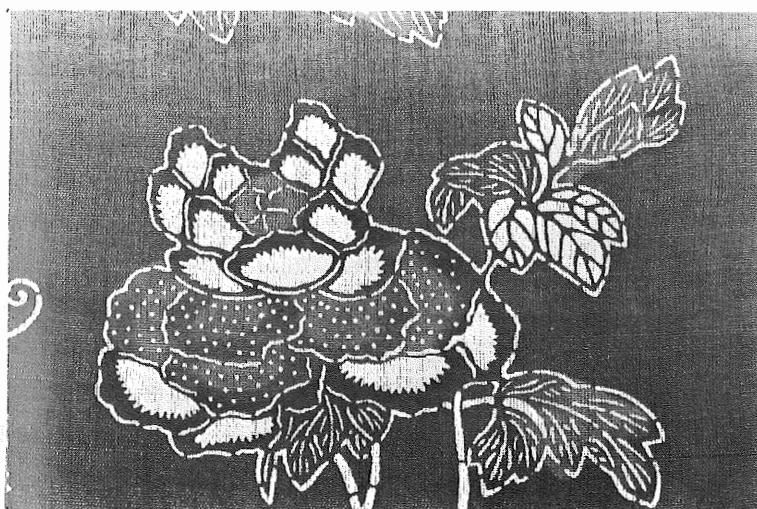


写真7 「バナドゥイ」の一例

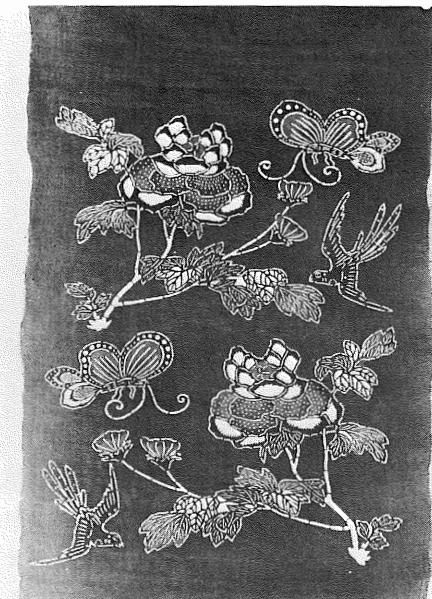


写真6 紺地牡丹蝶燕模様（城間栄喜氏作）

クルバナンジャサーがある。

筒描きの藍型は型紙こそ使われないが、防染の方法、模様の描き方、地染をするなどからして染地型の部類に入る。浅葱地と紺地があり、染地バナドゥイのうちのアサヂバナドゥイとミーチバナドゥイが施される。筒による白い線の太さ、力強さと、伸びきった線の勢いか、濃淡の藍の色と不思議な調和を見せ、多

色染めの筒描きの紅型とは違った独自の味を出す（写真8）。

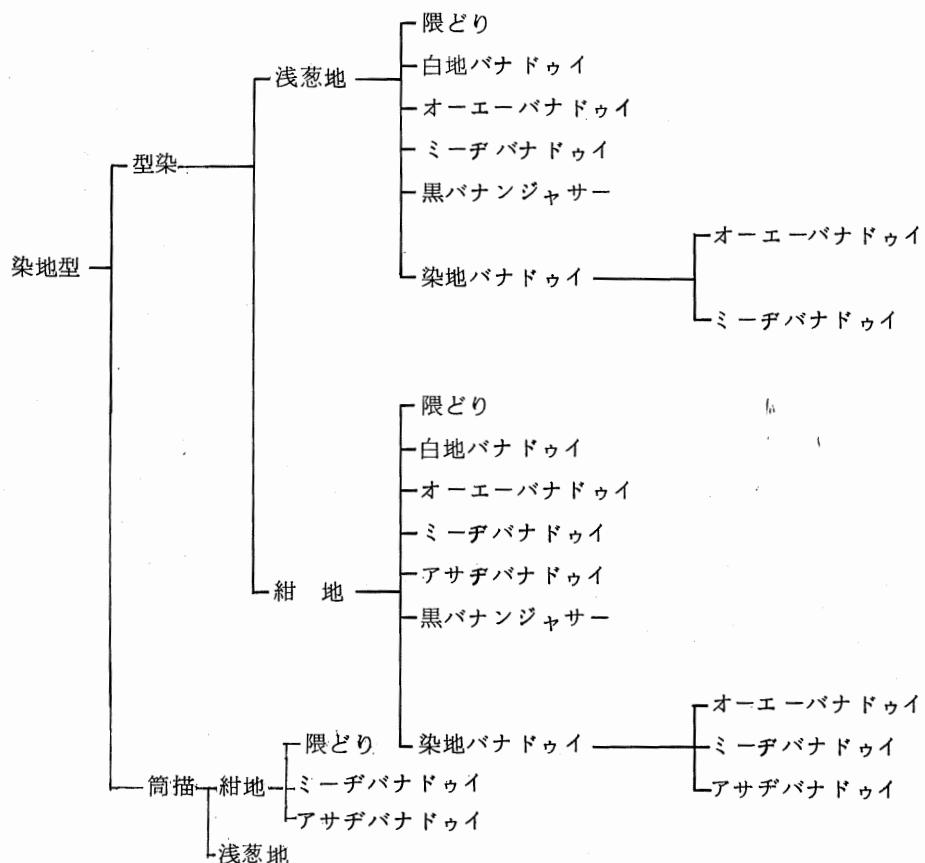


写真8 紺地筒描牡丹模様風呂敷（岡村前掲書より）

なお、染地型の藍型にこれらすべての手法がつねに使われているというわけではない。注文や模様の種類によってそのなかのいくつかを併用するのである。

#### 6. 白地型の藍型

白地型の藍型は大きく2つに分けられる。ひとつは、糊置きの後藍染めにし、その後で糊を洗い落としたもので、模様が藍の色や線で描かれ、白地になっているものである。前もって墨で限どりがなされることもある。技術的には単純だが藍の色が芭蕉布や麻の地色、材質感とマッチしていて、清楚感あふれる藍型である（写真9）。

もうひとつは、上記の工程で染めた図柄の一部を糊伏せし、地を染めたもので、場合によつては「ハナドゥイ」を何種かつくるために糊伏せと地染めを何度もくり返すこともある。白地型の紅型の一部を糊伏せして、地を染めることを「デーゲーシ」(地返し)と呼び、こうしてできた藍型を城間氏は「イ ェーウ ブルー」(藍麗)と呼ぶ。(写真10)細い葉や細い茎などは糊伏せをせずにそのまま色を重ねるので、

新しく染まった地色よりも濃くなり、地の中に影のように残る。はじめから糊伏せをした図柄は白く浮き出るし、それが白地型なら白地バナドゥイとなり、染地型だと括りの線がくっきりと現れることになる。2回、3回の地染めと糊伏せによって藍色のハナドゥイができる(写真11)。

藍ウブルーの限どりは2種ある。ひとつは前もって墨で限をとり、その後に1回目の地染めをするもので、もうひとつは2回目以降の地染めの前に葉や葉の一部を糊伏せするものである。後者の場合、糊を伏せなかつた花弁の先端や葉の縁の部分にはもう1度色が重なるので、その部分が限どりをされた形になる。これを「スミグマ」(染限)と呼ぶ。写真12は花の一部が糊伏せされ、花弁の先端がスミグマになつてゐることを示すものである。

藍ウブルーにも クルバナンジャサーがある。

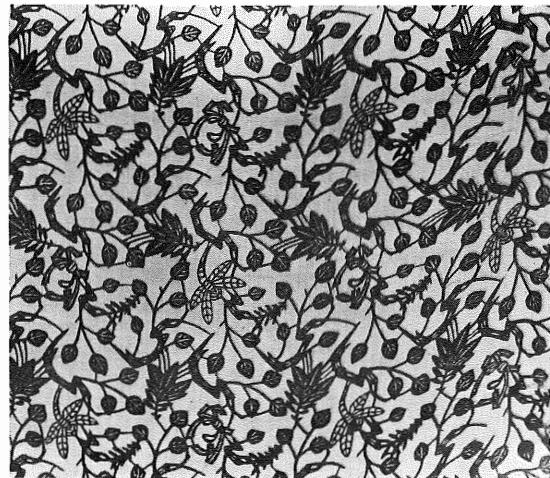
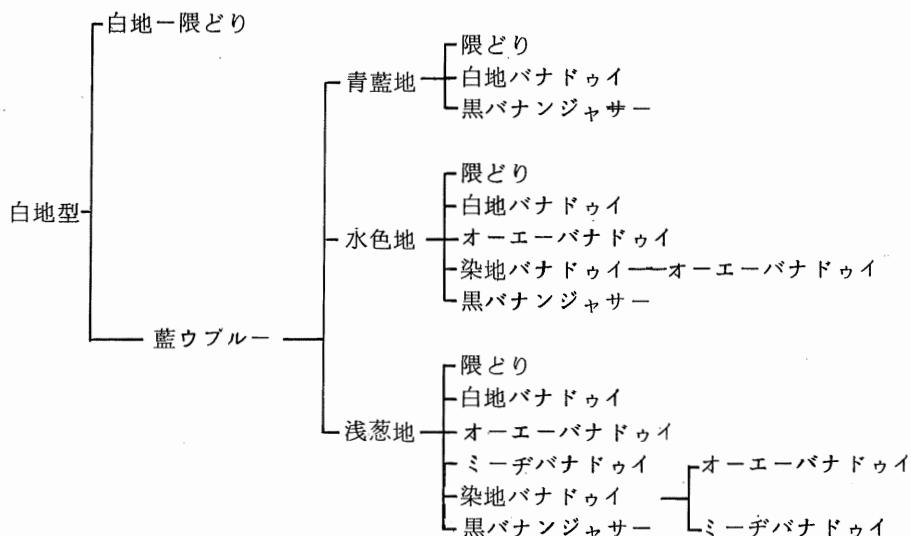


写真9 芭蕉布白地梯梧蜻蛉模様 (城間栄喜氏作)



染地型の藍型同様に藍ウブルーの場合も、このなかのいくつかの手法を組み合わせてつくることが多い。

#### 7. 藍型の美

藍型は芭蕉布や麻に染めることが多い。冬物もないわけではないが、ほとんどひとえの夏物である。したがって両面型付けが多い。焼けつくように暑い沖縄の夏の日には、生地そのものが風通しがよくて骨のある芭蕉布や麻に染められた藍型の着物は、涼風を誘うものであつただろう。

白地にして模様を藍で染めた白地型の着物や、地を藍の濃淡で染め白い線で模様の描かれた染地型の着物は浴衣を思わせる。しかし浴衣の生地は木綿である、芭蕉布や麻とは材質感が違う。それにハナドゥイや隈どりの技法を施してあるのでふつうの浴衣より奥行きがある。植物染料だから色に深さがある。

白地型の藍型に地を染め返した藍ウブルーは藍の濃淡と生地の白、墨の黒の組み合わせによって染め全体に表情と奥ゆかしさを与える。これにデーゲーシの効果が加わって藍ウブルーは朧月夜を思わせるような幻想的、神秘的な雰囲気をかもしだしている。藍型の美はこの藍ウブルーに結晶しているといつても言い過ぎではないだろう。

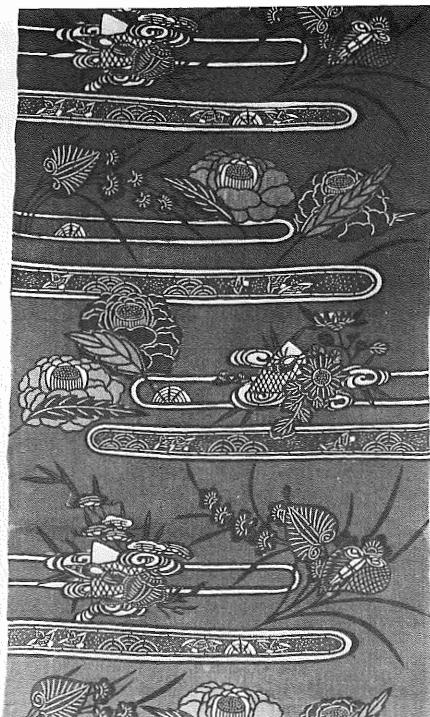


写真10

浅葱地藍ウブルー型椿菊葵霞模様（城間栄喜氏作）

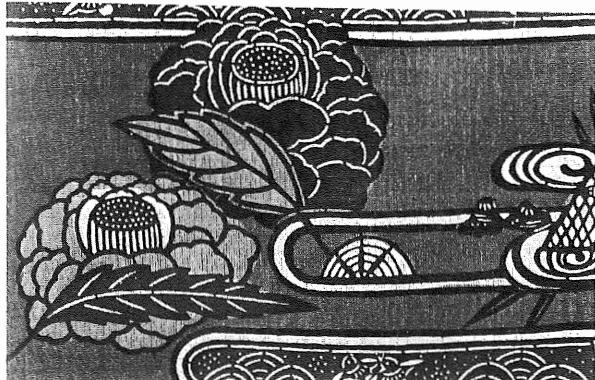


写真11

白地型に彫られた椿の花と葉が  
「ハナドウイ」になつている。  
花の花芯部が「シルヂバナドウイ」、  
花弁と葉は「ミーデバナドウイ」  
になつている。

写真12

「スミグマ」の例

